

キリギシ山に植物を訪ねて

中山 冽（佐久市鍛冶屋 194）

1998年6月、北海道の旅の途中、キリギシ山を訪ねる機会があった。ここは石灰岩の岩峰が林立する地として植物分布の上でも特異な山として知られている。最近1999年になって自然保護のため入山が規制されたという情報もあるので、垣間見た2~3の植物について紹介することも意味あることと考えた。尚、記録した植物名の中には、正確な同定が終わっていない種も含まれていることを承知願いたい。

キリギシ山は「峠山」と書き、切り岸の意で、“切り立った崖をもつ山”を意味する。標高は辞典では1073mとなっているが、地図には1057mとある。位置は芦別市の南端で夕張市に近い。夕張山地と呼ばれる地帯に属する（写真1）。

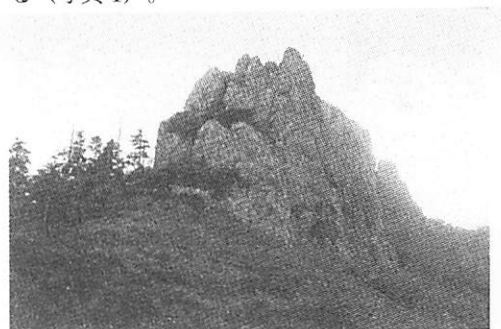


写真1. キリギシヤマ（峠山）の岩峰

夕張市から北へ60kmほど国道を走り、さらに林道を10余km入る。この林道終点あたりにはノビネチドリ、ハクサンチドリ、タニウツギなどが花をつけている。案内のHさんの後をついて道なき沢筋を登る。

草丈が80cmほどもあるエゾノリュウキンカ（ヤチブキ）が沢を埋めている（写真2）。

他にはヨブスマソウ、オオハナウド、オドリコソウ、オニシモツケ、オオバタケシマラン、リュウメンシダなどの高茎草本が

多く目につく。樹木はエゾマツ、シナノキ、ヤチダモ、オヒョウなどである。小さな滝を



写真2. エゾノリュウキンカ

越えるあたりから、ミヤマハンノキ、オガラバナ、シウリザクラに変わり、ミヤマハンモドキなども見える。林下にはエゾノハナシノブが2~3輪の美しい紫色の花を咲かせている。ナンブソウ（写真3）は花が終わっていた。

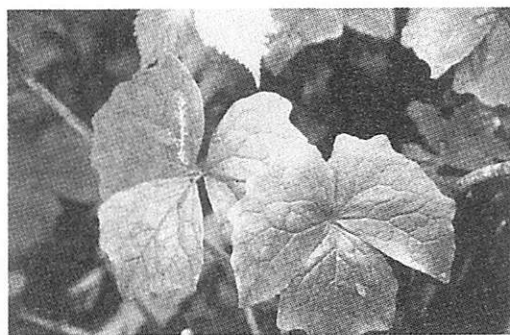


写真3. ナンブソウ

歩きはじめて2時間ほどで岩峰の下に着く。岩峰下のなだらかな草原にはシナノキンバイ、ハクサンイチゲ、エゾゼンテイカ、オオカサモチなどが一面に生育している。その草原の中にはシラネアオイ、クジャクシダ、スズラン、コウメバチソウ、エゾスカシユリなどが

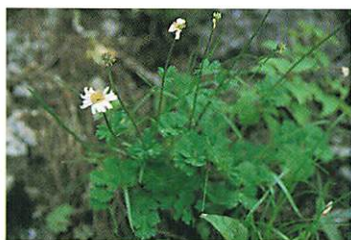


写真4. キリギシソウ
(キンボウゲ科)



写真5. キリギシアズマギク
(キク科)



写真6. オオヒラウスユキソウ
(キク科)



写真7. エゾグンナイフウロ
(フウロソウ科)



写真8. トチナイスou
(サクラソウ科)



写真9. ホティアツモリスou
(ラン科)



写真10. サクラソウモドキ
(サクラソウ科)



写真11. レブコザクラ
(サクラソウ科)



写真12. エゾスカシユリ
(ユリ科)

点々と見られる。

この岩場での目あては、何といってもキリギシソウである。少なくなったというHさんの話であるが、7~8株は見る事ができた。残念ながら花期が過ぎていた。1989年に発表された新しい植物である。学名は

Callianthemum sachalinense subsp.

kirigishiense とされ、唯一の産地名をとって「キリギシソウ」と名づけられている。北岳に特産のキタダケソウ、アポイ岳に特産のヒダカソウの同属である。また、アズマギクも淡紅色と白色の2型があるが、地元ではキリギシアズマギクと呼んでいるようである。アポイアズマギクと近縁の種と思われる。以前には沢山見られたというホテイアツモリソウは1株だけ花をつけている。また、キバナアツモリソウと同定できそうな株も葉のみを開いている。

その他、この岩場に見られたものを列記すると以下のようなものである。レブンコザクラ(花)、

ヤマハナソウ(花)、サクラソウモドキ(花)、チャボカラムツ(花)、ヒロハノヘビノボラズ(花)、カマヤリソウ(花)、イワオウギ(花)、オオタカネバラ、イワベンケイ(実)、ヒメナツドウダイ(実)、ウラジロキンバイ、ミヤマビャクシン、タカネグンバイ、ミヤマオダマキ(花)、イワウサギシダ、アオチャセンシダ、キバナノコマノツメ(花)、チシマゼキショウ、アサギリソウ、タカネオミナエシ(実)、チョウノスケソウ、ハイマツ、ムシトリスミレ、エゾグンナイフウロ(花)などをみる事ができたが、時間の関係もあり、うしろ髪を引かれる思いで沢の中を一気に下った。何日かをかけてゆっくりと観察したい山である。

尚、この山行は県植物研究会の池田登志男氏と同行した時の記録であり、現地では自然保護活動に熱心な本城昭市氏(夕張市紅葉市在住)に案内をお願いし、宿まで提供いただいた。併せて深謝申し上げる次第である。

＜新刊紹介＞

馬場多久男(1999年)著 「葉でわかる樹木-625種の検索」、信濃毎日新聞社、396pp. 3200円

この本は、長年樹木を見つめてこられた著者ならではの作で、すでに出版されている「冬芽でわかる落葉樹」の姉妹編でもある。多くの図鑑では科名がわからないと、問題の植物の種名まではなかなかたどり着けないが、この図鑑は葉の形態で検索できるようにくふう

され、一般の方にも植物名を探し当てることができるになっている。しかも全ページに実際の葉の写真が使われているため、視覚的に植物を捉えることも可能である。本の後半には個々の植物についての解説が施され、より深く理解できるようになっているが、近縁種や間違いやすい樹種との違いについても少し触れた方がよかったのではないだろうか。この本は、植物の自然観察会や野外を散歩しながら、ふとこの木はなんだろう、と思ったとき大いに役立つ一冊である(T.S.)